

共生の新たな深みへ向けて——マクルーハンのメディア理論再考

星山 玲於奈

はじめに

マーシャル・マクルーハンの提唱するメディア理論は、一九六〇年代に広く認知され始めた。マクルーハンのメディア理論は、彼自身が用いている独特な言葉の使用法や数多くの比喩や暗喩によって、難解であると言われる。現代においては多くの社会学者、メディア研究者たちが、人工知能や新技術による社会変容、あるいはシンギュラリティについての議論を展開しているが、マクルーハンが展開するメディア理論の中には半世紀以上の歳月を経ても、現在行われているメディア議論に十分対抗できるほどの、ある種の力強さが窺える。そこで本論はマクルーハンのメディア理論を、その背後にある彼の歴史認識をふまえながら考察し、マクルーハンが展開するメディア理論が切り開く、豊かな可能性を瞥見してみたい。

マクルーハンのメディア理論を分析したポール・レヴィンソンは、マクルーハンのメディア理論の基礎的な特徴について次のように言及している。「マクルーハンの洞察は、常に動いているメディアの世界をはつきりと見せてくれた。例えば、当時テレビは、本や新聞、ラジオ、映画を凌駕して人々の注目を集めるメディアとなりつつあり、その結果と

して政治、ビジネス、娯楽、教育、そして一般的な人々の生活態度に大きな影響を与えるまでになっていた。このようにメディアの戦国絵巻が、人々の支持を得るために時には魂を奪おうと競合する様を見て、マクルーハンがメディアはその種類によって人間の心理に対する働きかけが異なると考えたのはきわめて自然なことだった。例えば、映画をテレビ画面と映画館で見るのが違うのは、なぜでどのようになるのか。ニュースを新聞紙上で読むのとラジオで聴くのは、またそれをテレビで見るとはどう違うのか。マクルーハンはこうした問題を提起してそれらに答えようとする中で、五〇年代から七〇年代にわたつてのメディアとその影響力の複雑な分類法を考案した。その分類法は人類の起源にまで遡つて、文字以前の時代と電子時代のコミュニケーションの類似点などを考察することで、インターネット上でニュースを選択するのと新聞で読んだりラジオで聴いたりテレビで見たりするとはどう違うかといった、それから先のメディアを考える余地を十分に含むものだった⁽¹⁾。レイインソンは、マクルーハンのメディアの分類について細かく述べている。

マクルーハンが見ているメディアの分類法は、その分類の繊細さが彼のメディア理論の中に表れているように見える。レイインソンが主張しているように多くのメディアが世界中を跋扈する中、マクルーハンは単にメディアを分類するだけでなく、分類されたメディアの機能をよく捉えている。マクルーハンは新しいメディアの機能のみに目を向けるだけでなく、文字が使われる以前の時代、音声による文化から注目している。非文字文化社会と文字の文化、そして電子の文化という三区分は、それぞれが関わり合いマクルーハンのメディア理論を構成していると考えられる。

マクルーハンは、グーテンベルク以来の印刷術が発明される以前の歴史からメディアを捉えている。我々が今日目に見ている文字や書籍などの物質的記録媒体が生まれる以前には、言葉の発声と、それによる意思疎通の文化が根付いていたとしている。このような文化をマクルーハンは非文字文化、またはオーラルな文化と呼び方をしている。この非文字文化の最も重要な要素として挙げられるのは、五感の相互作用である。この文化の中で人間が持っている五つの

主要な感覚が相互に働きあい、その中でも聴覚と触覚がよく働きあつて、現実の深みある全体を開き示している。

さらに時代が進むと触覚、聴覚よりも視覚の強調が台頭し始める。マクルーハンは文字の誕生から印刷技術の発明によつて視覚が強調されていくとして、非文字文化に存在した聴覚、触覚やそのほかの感覚との相互作用が置き去りにされて非文字文化を象徴するような感覚、あるいは人間のつながりにおける全体性が分断されてしまったという。だが、マクルーハンは、産業革命以降の工業の時代を経てテレビが世に出現するに及んで、かつて非文字文化に存在したような一種の全体性が別の形で取り戻されうると考えている。マクルーハン自体は主に七〇年代から八〇年代におけるメディア研究者ではあるが、彼はインターネットなどの現代の電子メディアの誕生と普及をも予感していた。電子メディアの可能性を見つめるマクルーハン理論の背後には、彼の壮大な文明史的展望がある。その区分は非文字文化社会、文字文化社会（それはさらに写本文化社会、印刷文化社会に分けられる）、電子メディア文化社会というものである。このマクルーハンのメディア理論を考察していきたい。

一、五感の相互作用に生きた非文字文化社会

ここでは非文字文化社会の特徴を捉えていくのだが、マクルーハンは非文字文化社会における一番重要な概念として「聴覚的空間」という言葉を取り上げる。この聴覚的空間という言葉はレヴィンソンが詳細な分析を試みている。レヴィンソンはマクルーハンの聴覚的空間について、人間があらゆるものを五感によつて認知しうる空間であると分析している。マクルーハン自身も聴覚的空間に対して様々な例を挙げている。マクルーハンは現代において完全な非文字文化社会を形成しているコミュニティーを探するのは非常に難しく、非文字文化社会に一番近いモデルとしてアフリカ人を例

に挙げている。マクルーハンは西洋人とアフリカ人が持つ視座の違いをロンドン大学のジョン・ウィルソンの文献から取り上げて説明している。ウィルソンによれば、アフリカの原住民に溜まり水を除去するためのスロービデオを見せたところ、アフリカ原住民たちは水の除去手順よりも画面下方に映った鶏を注視して記憶していたという。つまり、文字使用に染まっている人間たちが後天的に習得したような絵を全体的、俯瞰的な視点から見るといふ視座を非文字文化社会に生きるアフリカ人たちは持ち合わせていないのである。文字使用に慣れている西洋人は画像や物事をあたかも空間を囲い込むようにして、俯瞰的な視座によつて全体を見渡すが、非文字社会に非常に近いモデルとしてのアフリカ人は、同じ人間の眼を単なる視覚としてだけの機能に留まらせることはせず、いわば触知するために使う。アフリカ人は「われわれが印刷された頁上に文字を追うように、断片から断片を追つて走査する。かくて彼等は対象を離れたところから客観視する視座をもたない。彼等はまったく対象と『共に』あり、対象のなかに感情移入によつてのめり込む⁽³⁾」。アフリカ人たちは西洋人とは違い、聴覚と触覚を切り離して視覚が強調されている幾何学的、あるいは合理的な空間とは全く無縁なのであるとマクルーハンは考えている。非文字文化社会に生きる人たちがなぜ西洋人と同じ目線で見ることができないのかを理解することは難しいことである。非文字文化社会に生きる人間は、写真や絵を三次元的に見るのではなく写真や絵の断片、あるいは自身もその絵の参加者であるような視点で見るのである。なぜこのような視座を持つのかというと、アフリカ人たちは視覚よりも触覚的、または人間の五感が相互に作用するような、手さぐりの一度に全体を見ようとせず、全体の一部分から全体に至ろうとする視座を持つからである⁽⁴⁾。

マクルーハンはさらにジークフリード・ギーディオンの議論を引用し、非文字文化社会に生きる洞窟画家たちの空間意識について言及している。非文字文化社会に生きる人間たちは、洞窟に描かれた絵を用いて神聖な儀式を行う場所、洞窟の絵に呪術的な力が宿る場所であると認識していた。そして洞窟の暗闇と、触覚的な感覚とによつて洞窟に描かれた絵は、はじめてその迫力と呪術的な動きを持つとギーデオンは分析している。マクルーハンが「触覚」を独立した

感覚であると考えず、五感の相互作用それ自体が作り出すものであると考えているのは、非文字文化社会の人間たちが持つている「空間」という概念が視覚的認識だけに頼るものではないからである。マクルーハンが提示しているアドルフ・フォン・ヒルデブラントの議論によれば、「触覚は五感の相互作用、一種の共感覚（シネセシア）から生じるという。従って触覚は芸術が人間に与える豊かな諸々の（効果）の中核を形成することとなる⁽⁶⁾」というように、触覚という感覚それ自体、人間が持つている五感の中心的存在となつているのである。

触覚と並行して、マクルーハンはE・S・カーペンターが展開するエスキモーの聴覚的概念の議論に従い、エスキモーたちの空間感覚において、エスキモーたちは視覚を中心とした俯瞰的空間視座を持たないという⁽⁷⁾。音声中心の文化の中では、時間と空間の同一性が重要となる。マクルーハンが述べているエスキモーたちの聴覚的な多方向性（マルチダイレクショナル）とは、文字に慣れた視覚中心の感覚を持った白人に理解することは難しいことであると指摘する。非文字文化社会に生きる人間たちは、文字文化社会に生きる人間たちよりも触覚的、聴覚的に自分たちが住んでいる世界になじんでいるのである。視覚中心でなおかつ世界を俯瞰的に捉えている文字文化社会の人間は、世界との一体感を持ち合わせていない。そこが非文字文化社会に生きる人々との違いである。非文字文化社会における触覚と聴覚的概念と文字文化社会における視覚的概念を対立的に議論することは、マクルーハンのメディア議論の中でも重要なトピックの一つである。

マクルーハンによれば、非文字文化社会は五感の相互作用に基づいており、空間は視覚的に眺められるものではない。したがって空間は静的なもの、測定可能なものとして見なされてはおらず、触覚、聴覚を中心とした五感の相互作用によって感じ取られているのである。このようにマクルーハンは非文字文化社会が人間にとつて第一次的、原初的なものであることを強調している。

マクルーハンは聴覚的空間の中から、ある宗教的な要素を引き出そうと試みている。マクルーハンはミルチャ・エリ

アーデを中心とした聖俗理論を用いて、非文字的な音声文化の中にキリスト教的な宗教性を見出そうとしている。マクルーハン研究においては、その中心に宗教性を置いているとは言い難く、多くの先行研究においてマクルーハンの宗教的要素は無視されがちである。しかし、マクルーハンは英国留学中にカトリックに改宗し、熱心な信徒になっていることからわかるように、マクルーハン思想の背景に宗教的要素を見出すことはできない⁽⁸⁾。中世期における高等教育機関では、ラテン語などの言葉の習得において書字よりも発声为重んじられていたというイストヴァン・ハイナルの主張をマクルーハンは取り上げる。この発音発声術こそが後にキリスト教教育において重要な要素となるのだが、発声とそれにつながる音読はキリスト教における聖歌隊の教育や聖書を読み上げて教訓とすることに非常に大きな役割を持つていた。また口述によって文字を書く行為も文字文化における文法や語句の習得に大きく貢献した。「わたしは、キリストが自分の訓えを文字に托そうとしなかったのはまことに適切であった、ということでもこの問題に答えたいと思う。まず第一にキリスト自身の教師としての尊厳がある。教師が卓れていなければならないほど、その教授態度も卓れていなければならない。したがって教師のうちで最も卓れた教師であったキリストが聴き手たちの心に訓えがそのままうつされてしまうやり方で説いたのはまことに彼にふさわしかった、といわねばならぬ。まさにこの理由でマタイによる聖福音書第七章二十九節には『なぜなら、イエズスが、律法学士のようではなく、自ら権威をもつ人のように、お教えになったからである』と書かれてあるのである。またやはりたいへんに秀でた教師であった異教徒ピタゴラスとソクラテスもなにも書こうとはしなかったのだ」というトマス・アクィナスの言葉もキリストを視覚的ではなく聴覚的な空間として捉えていることを指し示すものであると考えられる。音声文化と文字文化の間に宗教的な混交が現れていることについて触れたが、教会の建築様式に聴覚的宗教空間の要素をマクルーハンが見出そうとしていることに注目したい。マクルーハンはオットー・フォン・ジムソンの『ゴシックの大聖堂』の中で述べられている教会建築の特徴についての説明を引用している⁽¹⁰⁾。ロマネスク教会において建物に入ってくる光と重厚な壁の質感は区別されていた。つまり視覚的な立場から見

でも射光と石壁との境界は鮮明であった。しかしゴシック建築の教会の壁は多孔質であり、ステンドグラスを透過する光は壁にしみわたり、石壁の質感を変容させ、光で満たされた空間をつくると説明している。この光の透過は、ロマネスク教会とは異なり、触覚性を重視した聴覚的空間の特性を十全に發揮しているのである。

二、文字文化社会における視覚中心性

非文字文化社会から文字文化社会への転機となった出来事は、文字の誕生であり、とりわけアルファベットの発明であった。非文字文化社会から文字文化社会への移行は、触覚と聴覚を中心とする五感の相互作用の概念から、視覚中心の文化への移行を意味しているとマクルーハンは分析する。文字の発明により、部族的な相互作用の機能を有する共同体の消失と「個人」という概念が強調されるようになった。表音アルファベットが発明された時、アルファベット文化の時代、表音文字文化が形成されたとマクルーハンは考えている。文字発達についてマクルーハンはコリン・チェリーの議論を提示している。表音文字が発明される以前において、様々な観念、行為、名前などが単純な絵によつて表されてきた。しかし表音文字の誕生により、音声に記号的な象徴が与えられたことになった。時間が経つにつれて絵文字が単純化、同時に表音文字の数も簡略化されて、母音と子音の区別が出来上がった。エジプト文明における象形文字を見てもみると、多音節語の中の一つの音節に対して複数の文字が使用されている可能性があることが窺えた。その言語構造に「重複」と呼ばれる現象が含まれている。チェリーはこの「重複」の目的は読者に対して語を徹底的に理解させることであるという。チェリーは、逆の省略の例として古代ヘブライ語を挙げている。古代ヘブライ文字においては母音が存在せず、後述の母音記号によつて表される。さらに略記の進んだ例として、スラブ系ロシア語を挙げている。他方マ

クルーハンは、文字重複の概念は「内容概念」であり、話の中で発生する音こそが表音文字の内容であると考えている。しかし、他方では、表意文字や絵文字は個人、社会的状況のゲシュタルトであると主張している。数学において使われている数式などの非アルファベットの形式も、それ自体が形式と分離できる内容を持つものではなく、それ自体の世界を呼び起こす独自のメロディーであるとマクルーハンは主張する。⁽¹¹⁾ マクルーハンはまた、チェリーの重複省略と文字発達を同一視した議論について批判している。「アルファベットは視覚と聴覚を分離し両者の関係を断つのみならず、それぞれそれ自体では無意味な文字と音が恣意的に結びつけられているという関係をのぞいては、すべての意味を文字の音から切り離すのである。音自体、形それ自体としての意味以外の意味がいささかでも視覚化されたり、音声化されたりしている限り、視覚と他の感覚との分離は不完全な形でのこる。例えば表音アルファベット以外のすべての文字ではそうなのだ」という。⁽¹²⁾

アルファベットの発明以来、表音文字は重複の簡略化による発達と聴覚と視覚の分離がなされてきた。表音文字における聴覚的性格としての音の優位性と視覚との分離は、ある意味では非文字文化社会から文字文化社会への流れを受け継いでいると考えられる。文字によつて五感の相互作用から視覚が強調されたとしても、文字の知覚には人間の精神の内側に響き渡るような「音」概念がアルファベットを代表する表音文字を支えている一部ではないかと考えられる。しかし他方では視覚によつて文字から聴覚的、あるいは触覚的な音を感じ取るための修辞技法が用いられることにより、文字は視覚の強調から、五感の相互作用の新しい形への手がかりになる。

表音文字における決定的な研究をなしたデヴィッド・デイリンジャーの『アルファベット』をマクルーハンは引用してアルファベットの意義を指摘している。「アルファベットは最後の、もつとも高度に発達した、もつとも便利な、そしてもつとも容易にもろもろの言語に適用できる書き文字だ。アルファベット文字はいまや世界の文明諸国民によつて用いられている。その使い方は幼年期の間にじゅうぶん習得される。観念や音節を表わさずに、単一音を表わす文字に

は、あきらかにたいへんな有利さがある。八万字かそこらもある中国文字のすべてに精通している中国研究家はいない。それどころか、中国の学者たちが実際に覚える約九千字をマスターするののできたいへんな苦勞なのである。つまり、二二文字か二四文字、せいぜい二六文字かの記号を覚えるのはそれにくらべるとどんなに容易であるか、ということだ。またアルファベットはひとつの言語から他の言語へと難なく伝えられていく。…アルファベット文字の簡潔さによつて書字はたいへんに普及した。かつてのエジプトやメソポタミアや中国では書字は多かれ少なかれ僧侶や特権階級の専有物であつたが、アルファベット文字を使用する社会ではもはやそうではない。教育は主として読み書きの問題となり、万人に開けているのである。アルファベットが比較的小さな変更だけで三千五百年も生命をたもちつづけたこと、そしてそれのみか印刷術やタイプライターの導入、さらには社会における速記の広範囲にわたる使用といった現象にもいささかもゆるがなかつたという事実こそ、アルファベットがこの現代世界における必要に應じるだけの適性を具えていることのなによりの証拠なのである。そしてこの簡便さ、多言語に適用できる柔軟性、そして現代社会の要請への適性などが他の書字方式を向うにまわしてのアルファベットの勝利を確実なものとしたのだつた。…『アルファベット学 *alphabetology*』と呼びはじめている新しい研究分野を拓く。他のいかなる書字方式も、これほど広大かつ複雑で、興味深い歴史をもたないのだ⁽¹³⁾。マクルーハン自身、アルファベットに代表されるような表音文字が人間社会と文化にもたらす非部族化と個人化への過程について関心を寄せている。マクルーハンはデイリンジャーの見解についても一つ指摘に値することがあるという。「それは『観念や音節を表わさずに、単一音を表わす』ように、文字機能を極限して文字を使つていく技術の一般性、この技術が諸民族間でえた人気についてのコメントである。これを別の云い方で表現すれば、アルファベットをもつ社会ならば、それに隣接する諸文化を自国のアルファベット文化に翻訳することができるといふことにある。しかしこの翻訳はあくまで一方通行的現象であつて、非アルファベット文化がアルファベット文化を引き継ぐことはない⁽¹⁴⁾」。

しかしマクルーハンは、アルファベットのような表音文字の出現が、すぐさま人間を視覚の強調へと導かなかつたことを、ギリシア世界における「人間の分裂」を例示して述べている。「ホメロス詩の英雄は自我をそなえるにしたがつて分裂した人間となつたのだ。そしてその『分裂』は、これまでの聴覚中心の部族的な人間が視覚化の努力をいっさい払わなかつたような複雑な状況の絵画的なモデル化、または『からくり machinery』を見るにつけても明白であつた。すなわち、非部族化と個の出現と絵画化（「による諸觀念の把握」）はひとつの現象なのだ。呪術の様式は心理内部における事件が視覚的に明瞭になるにつれて消失する。しかしながら視覚化による明確化は、同時に複雑な心理関係の単純化でもあり歪曲でもある。こうした心理関係は五感の相互作用が活発に行われていたときには、はげしく感じとられていたものなのだ¹⁵」。こうした分裂によつて文字文化に生きる人間たちは、それまで非文字文化社会に存在したような部族的共同体としての社会から、人間が社会や他者への関わり合いを持たなくなつた社会へ生きることとなつた。文字文化とは人間を社会や他者から「切り離す」性質を持ち、文字文化社会は個人以外への態度を硬化させていくものであつた。

マクルーハンは西洋世界における非文字文化社会から文字文化社会への文化変容については、人間の持つ五感の分裂や人間の機能、活動、感情、政治状況や職業の分裂など、エミール・デュルケームが「社会的無秩序」（アノミー）という概念を提示したように、ある種の分裂化へと向かつていると分析している。今までの音声や身振り手振りなどの高度な参与性を求められる社会から、視覚による俯瞰的空間への移行と、集団から個人への細分化がなされた。文字を発明されて書物が人々に読まれ、印刷技術によつて頁の複製が容易になり、書物が量産されるようになること、社会が人間に求める参与性は著しく低下する。マクルーハンは、西欧人は時間空間的感覚を高度な視覚化に頼つていふというJ・C・カローズの主張を取り上げている。「ことばが記述されるとき、いうまでもなく視覚世界の一部となる。視覚世界を構成するほとんどの要素とひとしく、書かれたことばは静的な事物となり、聴覚世界一般、なかならず話された語

に特徴的であったあの力強さ、ダイナミズムを失ってしまう。書きことばは、聴かれたことばがもつ聴き手への直接の呼び掛けという個人的な要素の多くを失ってしまう。見られたことばは、それを読む自分に対して書かれたものではない。また読む、読まないにしても、読み手の気分ひとつに掛っている。書きことばは、たとえばモンラッド・クロウが描いたような情緒的なニュアンスや主題の強調力を失っている。……かくて、一般的にいつて、ことばは視られる存在となることによつて視る者に対しどちらかという冷淡な世界の側へと加わるのであり、その世界はそれまでのことばがもつていた呪術的な魔力が抽象化によつてすっかり抜き取られてしまった世界なのだ⁽¹⁶⁾というカロザーズの考察は、マクルーハンの考える文字文化社会の特徴をよく捉えている。触覚的音声は文字の誕生と視覚の強調によつて、文字や印刷の陰に隠れてしまった。社会または集団への参与性が低い視覚中心の社会は、社会的結合からの分断や専門化あるいは個人の閉鎖的孤立化を加速させるのである。この個人化を加速させる原因の一つに、情報で満たされているメディア、いわゆるホットなメディアで満たされていることが挙げられる。そしてカロザーズが言及している「ことばがもつていた呪術的な魔力が抽象化によつてすっかり抜き取られてしまった世界」という言葉についても、非文字文化社会が文字文化社会の中で失われてしまったような、人間の感性に対する冷たさのようなものが感じられる。言葉が持つていた呪術的な魔力を、電子メディア時代に適応する形で回復することによつて、人間は冷淡で閉塞的な文字文化の否定的な特徴から抜け出すことができるだろう。それまでの非文字文化社会によつて創り出された触覚中心の生き生きとした深みある世界が、文字・印刷文化によつて、視覚中心の孤立閉鎖的で、社会的結合の薄められたものに変えられてしまったことをマクルーハンは指摘し、この文化の否定面を強調している。

三、電子メディアが作り出す現実の新たな深み

マクルーハンがメディアを捉えている基本的な概念として、メディアは「ホットなメディア」と「クールなメディア」の二種類に大別される⁽¹⁷⁾。マクルーハンは、この二つの特性を持ったメディアを定義している。ホットなメディアを、「人間の持つ単一の感覚を高精細度へと拡張するもの」として定義し⁽¹⁸⁾、情報で満ち溢れたメディアとして取り上げている。一方、クールなメディアとは「情報で満たされていないもの」という定義づけをしている⁽¹⁹⁾。マクルーハンはホットなメディアとしてラジオを、クールなメディアとしてテレビを取り上げている⁽²⁰⁾。ここで一見奇異に見えるように、テレビはホットなメディアの定義に当てはまるのではないかという疑問が生じる。マクルーハンから見たテレビは、受け取り手の視覚と聴覚に多くの「雑多な」情報を与える。テレビから情報を得るためには、その雑多な情報の中から必要な情報を視聴者が選別する必要がある。この情報の選別こそがテレビというメディアへの「参与」であり、テレビを単に情報が多いメディアとして見るのではなく、視聴者に「参与」を求めるクールなメディアとして捉えていることが重要である。

ラジオがホットなメディアであり、テレビがクールなメディアであることの例としてマクルーハンは、ロシアの作曲家であるストラヴィンスキーのコンサートのテレビとラジオにおける放送の違いを挙げている⁽²¹⁾。テレビは、多くの雑多な情報を視覚と聴覚に訴えかけるメディアである。当時、ストラヴィンスキーのリハーサル風景はテレビを通じて放映された。いわば、本番の演奏までの「過程」を映し出す。つまり、きれいな演奏ばかりだけでなく失敗した演奏などの情報選別されていないものまで映し出すので我々はラジオよりも多くの情報を選別してクールなメディアとしてのテレ

ビへ参与しなければならぬ。そして、整然と出来上がった本番はホットなメディアとしてのラジオで流された。クールなメディア、ホットなメディアのどちらもメディアの性質として情報の質や形を変化させるものであり、情報の使われ方次第によって、情報を扱う者の受け取り方や行動に大きく影響を及ぼすものである。

まとめてみると、ホットなメディアとしての本や映画は受け手に対して物語や解釈を押し付けるメディアであるため、受け手は一方的に情報を押し付けられるので、その世界や解釈に入り込まれるのである。さらに受け手が主体的に世界を解釈することができないため個人は現場から疎外され、孤立化し、断片化（専門分化）するのである。⁽²²⁾一方で、クールなメディアはテレビや新聞などのように、受け手が情報を選別したり、自由に解釈して頭の中で再構成できる余地が存在しているメディアである。ホットなメディアとは違って情報の解釈や世界を押し付けられないことがないため、主体的に情報を構成することができる。

マクルーハンが電子時代と呼ぶ時期に特に注目したものがテレビであった。情報で満たされたメディアによって個人化が進んだ電子時代に、高度な参与性が求められるメディアの出現によって、非文字文化社会に存在したような五感の相互作用が働く有機的な社会的な結合の回復をマクルーハンは示唆している。ここでマクルーハンは、テイヤールド・シャルダンの「精神圏」という概念を用いている。シャルダンは古生物学者であり、地質学者であった。またシャルダンはカトリック教徒でありながら進化論を認めていたため、ローマ教皇庁から異端と見なされていた。そのため、シャルダンの主著である『現象としての人間』をはじめとする生前著書が禁書扱いを受けた。シャルダンの『現象としての人間』⁽²³⁾の中において、人間が「生物圏」という段階から進化して「精神圏」の初期段階にいとシャルダンは言う。

マクルーハンは電気メディアの出現と人間社会について次のように分析している。「文字社会がつくりだした偏見を抱く批判的な心の持ち主は、ド・シャルダンのこのかまびすしい熱のあげようにうんざりするにちがいない。われわ

れのさまざまな感覚を電気で薄くひきのぼし地球をすっぽりと覆う、宇宙皮膜（コスミック・メムブレイン）へのド・シャルダンの無批判的な情熱と同様、それは文字社会人間には不可解な情熱だ。だが、われわれの五感のこの外化こそ、ド・シャルダンが「精神圏」（ヌースフェア）と呼ぶもの、もしくは世界全体のために機能する、いわば技術的頭脳（テクノロジカル・ブレイン）を創造するものなのだ。巨大なアレクサンドリア図書館の建設にむかうかわりに、世界それ自体が、まさに初期の頃のSF本に描かれていたのとそっくり、コンピュータ、電子頭脳となつたのである。そしてわれわれの感覚が外にむかつたように、ビッグ・ブラザーはわれわれの内へとむかう⁽²⁴⁾。ド・シャルダンが提示している「精神圏」という言葉は、電子メディア時代における共生という意味においては、非常に重要な概念となりうるだろう。この精神圏なる語は、インターネットの比喩としても用いられる。この現代におけるエレクトロニクス技術によつて電氣的な神経を張り巡らせて、世界規模での共生や相互作用といった感覚が拡張されていると考えられる。現実には生きる世界と電気、あるいはプログラムの構成された空間の中でもエレクトロニクス技術によつて、ヒルデブラントの議論の中に出てきた「共感覚」の時代が訪れていると言つても過言ではないだろう。五感の相互作用という言葉そのものが、単に言葉通りの意味のみならず、様々なものと関わり合いを持つことに使われる。人々は技術によつて感覚を共有し、視覚を共有し、あるいは聴覚、味覚、そして嗅覚を共有できうる時代に来ていると考えられる。様々な人間の体験を他の場所での経験し、あるいは人間によつてそれらの体験を作り替えられて、それは全く新しい経験となるだろう。ある人間の精神への参加が、人間が作り出す音声や文字のみならず、電子的なデータベースに集積されることで、膨大な数の人間との関わり合いを大きく推し進めたと考えられる。マクルーハンが「地球村」という概念を用いて説明している。

マクルーハンの地球村、いわゆるグローバル・ヴィレッジの概念は『グーテンベルクの中の銀河系』の中で触れられている。マクルーハンは「電子技術による新しい相互依存は、世界を地球村のイメージで創りかえる⁽²⁵⁾」という言葉を用

いている。人間の住む世界は複数の世界や文化の中で同時存在的に生き始めていて、テレビをはじめとする電子技術によって、我々の世界は一つの統合された「場」を形成しつつあるというのがマクルーハンの「地球村」概念である。

地球村の概念の背後にはマクルーハンの新しい空間意識が存在することに注目したい。電子メディアの産み出す「空間」という概念は、人間が持つ機能と精神を拡張すると同時に世界そのものの拡がりを縮小させるものである。メディアが、人間が持つ機能の拡張であるというマクルーハンの基本的な理論は、世界の縮小とともに同時性を加速させる。神経のように張り巡らされた電子的なネットワークの中で、人間は自らが持つている感覚を技術的な立場から同時に、また相互に拡張しあう。マクルーハンは「あらゆるものが同時に存在する世界」という言葉を用いているが、それは文字文化社会に存在したような、線形的な概念を消失した世界であり、あらゆる線形性格の形式は消失するのであると考えている。マクルーハンは、電気メディアの登場によって文字文化社会は我々が持つ線形的な性格を喪失すると言っている。マクルーハンは洞窟絵画に典型的現れた非文字文化社会の空間意識と、エレクトロニクス世界における空間意識との共通点を見出すことができると考えている。非文字文化社会に存在した空間意識に代表されるような触覚的概念は、エレクトロニクス世界において大きく拡張され、精神圏、あるいは宇宙皮膚という語の概念により人間の精神的な空間的制約が大きく緩和されるのである。

東浩紀氏のマクルーハンの論考「サイバースペースはなぜそう呼ばれるか」において、電子時代のマクルーハンについての分析がなされている。マクルーハンは、電子メディアの到来によって時間と空間という壁を打ち払い、情報の伝達速度は速くなり同時性を帯びるようになると、地球全体が一つの村のようになると考えている。また非文字社会の性格としての五感の相互作用、あるいは相互依存の体制は、電子メディア登場以降の地球村の性格であるとマクルーハンは考えている。東はこのような情報の伝達速度の上昇によって世界の縮小が起こっていて、そのような考えはマクルーハン以前から存在すると東は次のように主張する。「たとえば一九三〇年代にハイデガーは、ラジオを例に挙げ『あら

ゆる種類の速度の高騰は遠隔性の克服を目指す』と述べている。⁽²⁷⁾ 東はハイデガーのこうしたメディア議論では、「電子メディアとは世界の近さを保証する装置、『遠隔性の除去』の過激化した形態に過ぎない (tele = Entfernung)」と考えている。⁽²⁸⁾ ハロルド・イニスもメディアが空間を支配する機能を有していると主張する。⁽²⁹⁾ マクルーハンはド・シャルダンの精神圏という概念を電子メディア時代に適用した。マクルーハンはメディアが空間そのものを縮小させる能力があると考えている。東はまた、マクルーハンの著書『グーテンベルクの銀河系』における空間と精神についての分析を次のように行っている。「しかし、『グーテンベルクの銀河系』が今も重要なのは、そこにメディア理解をめぐるもうひとつの隠喩＝概念系が組織されていたからである。マクルーハンは「精神圏」について語った。この語の選択は、彼がメディアそのものを「空間」「場」として扱っていたことを意味している。ここではメディアは始点と終点(発信者と受信者)、二つの現実空間に挟まれた単なる時間経過ではない。両者の間には情報経路がある。そしてその経路のネットワークに、ある奇妙な「空間性」が宿る。『グーテンベルクの銀河系』という書名自体、情報が飛び交う場のこの物象化により成立していると言える。マクルーハンは次の著作でより明確に述べている。『人間が電気の技術によって中枢神経組織⁽³¹⁾を拡張してしまつたいま、戦争でも商売でも、戦いの場合は精神世界のイメージ創造とイメージ破壊に場所を移してしまつている。……情報が中枢神経組織の中を信号の速度で移動するとき、人は通路とか鉄道網とはまったく異なつたタイプの情報空間を産出するのだ』⁽³²⁾。

この異なつたタイプの情報空間として、我々は現在二つの大きな空間の可能性の前に立っている。一つはヴァーチャル・リアリティの空間であり、もう一つはインターネット上におけるオンライン・ディスカッション・システムである。この両方の可能性についてもマクルーハンは予見していたように思える。

ではまず第一の空間について考えてみよう。クリストファー・ホロックスは通常のマクルーハン理解には入つてこない決定的な要素を含むものとして、マクルーハンの次の言葉を引用している。「書き言葉を超えることで、われわれは

知覚の完全さを取り戻した。国家や文化という局面ではなく、宇宙的な局面において。われわれは文明を超越し、原始時代に準じた存在としての人間を呼び起こした⁽³³⁾。「マクルーハンの仕事は、人口に膾炙した……『回帰の神話』にその基礎をおいているからである」さらに彼は言う、「われわれは今や、グローバル・ヴィレッジの中で暮らしている⁽³⁴⁾」と彼は唱える。「それは、同時性を帯びた出来事なのでわれわれは聴覚的空間へと戻ってきたのだ、原始の感性、書き言葉と印刷の発明に先立つ文化に息づいていた部族的感情（ほんの数世紀読み書きにさらされただけで、われわれから切り離されたもの）を構築し始めている⁽³⁵⁾」。

このようなマクルーハンの世界を理解するために、ホロックスはヴァーチャルな世界と現実世界の接合の四つのモデルを挙げて考えている。一番目のモデルは「ウソを含みつつ近づこうとするもの⁽³⁶⁾」としている。このモデルは、人間の表層的な感覚によって作られる。具体的には、劣化したコピー、シミュレーション、完璧すぎる変形などである⁽³⁷⁾。第二のモデルは「ヴァーチャル・リアリティが現実の「解像度を上げたもの」、あるいは「ハイパーリアル化したもの⁽³⁸⁾」である。解像度を上げるといふところの意味は、眼鏡が視覚の解像度を補強するようにヴァーチャル世界によって現実世界を補強する作用が含まれている⁽³⁹⁾。三番目の形態はヴァーチャル・リアリティを現実なものへと完全に溶解させるものとし、そこで人間たちは現実世界を離れてテクノロジーの中へと逃げ込むのである⁽⁴⁰⁾。第四のモデルでは「ヴァーチャル世界と現実世界の間には何の区別もないのであるということになる。現実的なものはつねにヴァーチャルだというわけである⁽⁴¹⁾」。ホロックスによれば、「マクルーハンはヴァーチャル・リアリティを、現実を写し取りそこねたウソとは見ようとしなかった⁽⁴²⁾」。第二のモデルに関して言えば、ホロックスによれば「マクルーハンは歴史上、『現実』が不毛なもの……再現されるであろうというのだ⁽⁴³⁾」。現実世界からの逃避であるという第三のモデルに関しては、ホロックスによれば「ヴァーチャルな世界は逃避ならぬ、現実世界への回帰となるのである⁽⁴⁴⁾」。現実とヴァーチャルの境界を取り払うという第四のポストモダン的なモデルに対するマクルーハンの態度は、両義的であるとホロックスは解する。根源

的現実を電子テクノロジーを介在させて、回帰させようというのは、現実とバーチャルの境界を取り扱うことであるから、ポストモダンに極めて接近している。しかし原始的感覚への回帰という考えは、現前性と直接性を批判するポストモダンの原理とは相いれないとホロックスは判定する。しかし現実とバーチャルの境界を取り扱うというマクルーハンの考えに潜む可能性は大であると言える。ホロックスはマクルーハンが声の文化と文字の文化が重ね合わされる次元を垣間見ていたとする。

では次にオンライン・ディスカッション・システムについて見てみよう。レヴィンソンは、小さな村の住民としての声に対し、発話者の目と耳の届く範囲を超えた大衆を印刷技術が創出したと考えている。⁽⁴⁵⁾しかしその反面、本来の聴覚的性格を喪失してしまつたともレヴィンソンは言及している。しかしその後、テレビやラジオの出現により印刷では失われてしまつた聴覚的性格をある程度まで回復することができた。グローバル・ヴィレッジという言葉が生み出された当時も、「五感の相互作用」や共感覚という概念とは結びついていなかった。情報が世界規模で同時性を帯びるほどの速度で伝達し、エレクトロニクスによる相互作用という一形態としてマクルーハンはインターネットにおけるオンライン・ディスカッションを予見している。マクルーハンが予見するエレクトロニクス世界におけるオンライン・ディスカッションについてレヴィンソンは、話し言葉による会話とつながりがあると考えている。非文字文化社会の中で語られた聴覚的概念についてもレヴィンソンは次のように説明している。「彼は聴覚的なものは、人間のコミュニケーションの基本（発達初期、あるいは原始）⁽⁴⁶⁾で、書き言葉による線形の会話の方法の台頭によって損なわれたが、電子メディアによつて復活すると考えていた」。しかし、マクルーハンの考える相互作用についてグローバル・ヴィレッジのみの議論では十分になされていとは言えない。

この議論とは別にインターネットにおける相互作用について、マクルーハンのホットとクール概念を使って、レヴィンソンはエレクトロニクス世界における相互作用について分析している。オンライン・コミュニケーションという

形態は、エレクトロニクス時代における最もクールな形態である。こうしたクールの問題には、「参与」の度合いが付きまとう。テレビはそれ自体、音声的な面を取り上げれば、音に特化した「ホットな」電子機器が世にあふれているし、映像を取り上げれば映画のような迫力は感じられない。テレビの他にも様々なホット・メディアが存在する中、テレビはクールなままであり、マクルーハンはテレビこそが五感の相互作用、あるいは共感覚を取り戻すものであると考えている。レヴィンソンは、そうしたテレビがクールであるということが開く可能性を次のように述べている。「……重要なのは、それにこだわることなく、少し前に述べたように、テレビがクールである可能性を、視聴覚の仲間である映画ばかりかラジオや印刷とも比較しながら検討する心構えを持つことだ。換言すれば、ホットとクールは、単なる二つのメディアを相対的に比較するための物差しではない。むしろ人間がメディアの利用するときの特性、同じ環境に別のメディアが存在しても、それとは無関係にある程度存続できるメディアの特性なのだ」⁽⁴⁷⁾。テレビがクールであり、エレクトロニクス世界の中で五感の相互作用が生まれるかという議論の中には、インターネットをはじめとするメディアとの比較が主になると考えられる。

電子時代においてホットなメディアによって専門分化され個人主義に傾倒しがちな人間にとって、現代は情報過多状態とも呼べるような状況になっている。インターネット技術をあたかも神経のように張り巡らせてきた人類は、その膨大な情報量によって世界が「熱すぎる」状態へと進んでいるのである。マクルーハンは考えていた「ホットなメディア」がもたらす一方通行的な情報の流れは、今や膨大で速い巨大な流れとなっている。つまり、熱すぎるメディアは個人を断片化するのみならず、極端に解釈や選択の自由がなく、非常に窮屈な状態をもたらしかねない。レヴィンソンはテレビをクールなメディアとしながらも、非相互依存的であると言っている。テレビがクールなメディアでありながらも、非相互依存的であると主張したレヴィンソンは、オンライン・ディスカッションを行うためのメディアであるパソコンについて言及している。「パソコンに対する初期の、そしていまだにニール・ポストマンをはじめとするメディア

評論家の間で有力な評価は、パソコンはテレビ画面をただ改良しただけの代物であり、認知過程にテレビと同様の影響を及ぼすだろうというものだった。賢明なユーザーの考えは、コンピュータは新たな種類の本だと捉えたほうが妥当だというものだった。いずれにしろ、パソコンは全世界に広がる電話システムに接続すると同時に、テレビと本に変身する。そして、特殊な電話となり、強力でクールでインタラクティブな性質を持ち続けるばかりかそれは強まる。それを産み出したのは実際には、電話、テレビだけではなく、本を加えた三つのメディアだ。そして最初の二つがクールなメディアなのだから、オンライン・テキストがクールになるのは至極当然のことなのだ⁽⁴⁸⁾。

このレイインソンのパソコンに対する言及は、レイインソンがパソコンを相互作用の回復への可能性を示唆しているものである。実際にオンライン・テキストはいまや電子書籍の形態を取っている。テレビや電話でさえも現代においてパソコンがその役目を代替することができる。インタラクティブの概念は、いまや現実世界のみだけの話でなく電子的仮想空間にまで拡張されている。電子的な世界において電子の肉体を構成し、電子的に構築された仮想空間において、電子的な「世界村」の中で相互に作用しあうのではないかと考えられる。その中では、あらゆる人が様々な電子的なコンテンツの提供者となり、あらゆる人が感化される。それゆえに他方では人間がコンテンツを提供したり、情報を選別したりする過程において、自己の都合のいい情報だけを抜き取り、情報を発信することによってとめないスピードで拡散されている。現実にはデマやフェイクニュースがあふれている。現代において非常に速い速度で拡散される誤った情報は、社会における様々な状況において多大な混乱をもたらす可能性を秘めている。また、自己に対して肯定的な情報のみを選別することで、否定的な面を見ようとせず自らの世界へと閉じこもってしまうといった、現実世界への参与を拒否する動きが見受けられる。情報の速度の速さは便利であるが、それに伴う情報を扱う側の情報判別能力やモラルなどが問われてくる。電子メディアがもたらす光ならぬ影の部分のマクルーハン自身が見つけていた。「そしてわれわれの感覚が外にむかったように、ビッグ・ブラザーはわれわれの内へとむかう。そしてわれわれがかりにこの新時代

の力学に気づかない時には、われわれは部族的太鼓の鳴り響く小世界に似つかわしい世界、制することのできない恐怖の時代へとただちに移行することになるだろう。それはまた、相互依存の時代、上から押し付けられた共存の時代である⁽⁴⁹⁾と。マクルーハンが述べた「新世代の力学に気づかない恐怖の時代」という言葉は、電子メディア時代における個人の閉鎖的な社会への態度に言及しているようにも思われる。そのような電子メディアが齎す否定面もあるが、現代は、現実空間と電子的仮想空間の二つの空間で、五感の相互作用による有機的な社会結合の可能性を秘めていると考えられる。マクルーハンのメディア理論は電子メディアによる「深みへの参与」(the participation in depth)⁽⁵¹⁾への道筋であり、世界規模の再統合化の実現を望み見ている。電子メディアによって世界全体的に相互に参与する社会を作り上げようというのである。電子メディア時代における社会への参与と共生へ向かうための世界規模の共同体を創り上げることを目指している。電子メディアによって作られる世界規模の部族的な共同体という一つの新たな現実の深みへの参与の道をマクルーハンは示していると考えられる。

まとめ

マクルーハンの非文字文化社会、文字文化社会、および現代の電子メディア社会の分析を辿ってきた。非文字文化社会に生きる人々は触覚、および聴覚を中心とする五感の相互作用において生きていた。彼らの時間・空間意識も現代人のような視覚中心のものでなく、聴覚と触覚を中心にして規定された生き生きとしたものであった。

しかし、そうした五感の相互作用は、文字文化の発達によって失われ、視覚を中心とした文字の文化が形成された。人間は非文字文化の走査的、手さぐりの視点から文字文化における全体を見渡すような視点を手に入れた。しかし非

文字文化社会に存在したような部族的な共同体は失われ、個人が切り離されて社会や他者への関わり合いは薄れていった。アルファベットの発達や印刷技術の発明は、より一層の個人化、あるいは専門分化をもたらした。

電子メディア時代では、マクルーハンは新たな五感の相互作用の回復が可能であると主張し、その主役をテレビに見出していた。というのも、テレビは多くの情報を提供するが、その中から視聴者は選択によって現実に参加しなければならぬからである。

文字文化によって孤立していた個人が、電子メディアによって新たに、社会のうちに統合され、現実の新たな深みへ参与することが可能となるとマクルーハンは指摘する。電子メディアの使用が、文字文化社会以来存在してきた個人化と専門分化を一層促進するという危険を孕みながらも、マクルーハンが考えていたような、個人が社会に有機的に参与するような世界が見出せるのではないかと考えられる。

注

- (1) ポール・レヴィンソン『デジタル・マクルーハン——情報の千世紀へ』服部桂訳（NIT出版、二〇〇〇年）、一八頁。
- (2) マーシャル・マクルーハン『グーテンベルクの銀河系——活字人間の形成』森常治訳（みすず書房、一九八六年）、五九—六一頁。
- (3) 同上書、六一頁。
- (4) 同上書、六三—六四頁。マクルーハンは非文字文化社会に生きる人たちが映像を見ると、彼らは単に見るだけの受け身

の姿勢だけでは終わらないと述べている。つまり、映像を見ている非文字文化社会の人間たちも自らメディアへと「参与」することが述べられている。

- (5) 同上書、一〇二頁。
- (6) 同上書、六七頁。
- (7) 同上書、一〇四頁。
- (8) マクルーハンがカトリックへと改宗したことについては中澤豊『哲学者マクルーハン——知の抗争史としてのメディア論』（講談社、二〇一九年）、一五二頁を参照
- (9) マクルーハン『グーテンベルクの銀河系』、一五三頁。
- (10) 同上書、一六四頁。
- (11) 同上書、七四頁。
- (12) 同上書、七五頁。
- (13) 同上書、七六頁。
- (14) 同上書、七九頁。
- (15) 同上書、八三頁。
- (16) 同上書、三四―三五頁。
- (17) レヴィンソン『デジタル・マクルーハン』、三二頁。
- (18) Marshal McLuhan, *The Extensions of Man*, in: Marshal McLuhan, W. Terrence Gordon (ed.), *Understanding Media* (Berkeley, CA: Gingko Press, 2003), 39. (A hot medium is one that extends one single sense in "high definition." High definition is the state of being well filled with data)
- (19) McLuhan, *The Extensions of Man*, 40. (A cartoon is "low definition," simply because very little information is provided.)
- (20) *Ibid.*, 44.
- (21) *Ibid.*, 49.
- (22) 大西康雄「マクルーハンがデジタルメディアの夢を見たか——マクルーハンの「ホット／クール」メディア概念再構成の試

- み」『山梨国際研究 山梨県立大学国際政策学部紀要』第九号、二〇一四年、一六頁。
- (23) 中澤『哲学者マクルーハン』、一六二—一六三頁。
- (24) マクルーハン『グーテンベルクの銀河系』、五三頁。
- (25) 同上書、五二頁。
- (26) マーシャル・マクルーハン、エドマンド・カーペンター編著『マクルーハン理論——電子メディアの可能性』大前正臣、後藤和彦訳(平凡社、二〇〇九年)、一一—三頁。
- (27) 東浩紀「サイバースペースはなぜそう呼ばれるか」、マーシャル・マクルーハンほか『マクルーハン——生誕100年、メディア(論)の可能性を問う』(河出書房新社、二〇一一年)、一八七頁。
- (28) 同上。
- (29) 同上。
- (30) 次の著作とは、Meluhán, *Understanding Media* (2003) を基としている。
- (31) 電子メディア時代において、マクルーハンはインターネットの比喩として「中枢神経組織」という言葉を用いて表現している。
- (32) 東「サイバースペースはなぜそう呼ばれるか」、『マクルーハン』、一八七頁。
- (33) クリストファー・ホロックス『マクルーハンとヴァーチャル世界』小畑拓也訳(岩波書店、二〇〇五年)、四七頁。
- (34) 同上書、四八頁。
- (35) 同上。
- (36) 同上書、五一頁。
- (37) 同上。
- (38) 同上。
- (39) 同上書、五二頁。
- (40) 同上。
- (41) 同上書、五五頁。

- (42) 同上書、五九頁。
- (43) 同上書、六〇頁。
- (44) 同上。
- (45) レヴィンソン『デジタル・マクルーハン』、五九頁。
- (46) 同上書、六八頁。
- (47) 同上書、一八七頁。
- (48) 同上書、一九六頁。
- (49) マクルーハン『グーテンベルクの銀河系』、五三頁。
- (50) 同上。
- (51) マクルーハンは、電気時代の人間が新たな聴覚の様式へ向かう様を「現実への参与」、または「深淵への参与」という言葉を用いて表現している。McLuhan, *Understanding Media* (2003) の中で言及されている。